

博士学位論文審査要旨

氏名	張 韜
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第270号
学位授与の日付	2021年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文の題目	明清小説における福建の女神の形象について —媽祖と臨水夫人陳靖姑を中心に—
論文審査委員	主査 神奈川大学 教授 鈴木 陽 一 副査 早稲田大学 教授 岡崎 由 美 副査 神奈川大学 教授 廣 田 律 子 副査 神奈川大学 教授 村 井 寛 志 副査 神奈川大学 准教授 松 浦 智 子

【論文内容の要旨】

1)本論文の目的

本論文は、明清時代の白話小説における福建地方の代表的な神格である媽祖と陳靖姑の形象を明らかにすべく、いくつかの文字化された物語、白話小説を文学作品として分析すると同時に、その背景となる福建の歴史、地域文化の特長と関連付けながら論じたものである。さらに、地域の宗教の動向を左右する王朝の宗教政策を視野に入れつつ、これに対応する宗教組織の動きや信仰のあり方の動きが時代と共にどのように変化していったか、またその変化がどのように物語のストーリー、プロット、キャラクターに影響したかについて検討を試みた。研究に当たっては、小説と正史或いはこれに準ずる歴史記述とともに、野史、様々なタイプの筆記類、戯曲、説唱芸術と言われる語りもの芸能をも視野に入れ、資料として利用している。

2)全体の構成

序論

第一章 先行研究と問題提起

対象となる小説の版本と、それぞれの作品に関する先行研究を紹介し、問題点がどこにあるかを論じ、さらに議論の前提となる福建の地域文化の独自性について、宋代から清代に至る中国史を概括しながら論じている。特に福建と他地域との海上交通を利用した商業の発展を地域文化の特色の根底にあるものと捉えるべきであり、本論文のテーマである女神信仰と小説の分析にもその点を重視すべきであることを主張する。

第二章 媽祖と関わる小説の解読

本章では、媽祖の信仰と媽祖を主人公とする『天妃娘媽傳』の分析を中心に議論を進めている。まず媽祖信仰が宋代から明末の小説の刊行に至るまでの間にどのような発展変化を遂げてきたかを、各王朝の宗教政策とその影響を、それぞれの時代の媽祖に関する記述（伝承、物語を含む）を集めて整理しながら論じている。そのうえで、『天妃娘媽傳』における媽祖の形象だけでなく、鄭和の大航海をテーマとする『三宝太監西洋記』における媽祖や、短編小説に現れる女神の形象を分

析していく際に、『西遊記』などの「神魔小説」との間に間テキスト性が成立していることを取り上げるとともに、さらに『天妃娘娘傳』における「妖怪」の形象は、「北虜南倭」と言われた、明朝が直面する国家的危機の反映でもあると論じている。

第三章 陳靖姑と関わる小説の解説

陳靖姑に関する宋末元初の記録から清代に至るまでの文献を調べ、また現在の陳靖姑進行について現地調査を行い、媽祖との信仰の内容の差異を明らかにしたうえで、それが小説『海遊記』にどのような影響を与えているか論じている。明代は民間宗教に対して規制が強まった時期であり、これに対応する動きと、陳靖姑の物語において生じたテキストによる形象の差異との関連について論じるとともに、福建の地域文化の影響の下、子授け子育ての神であった陳靖姑が、死と再生の神となり、蛇神の形象、水神の機能を持つに至ったこと、福建と古くから行き来のあった江西地方で信仰されている許慎君とのつながりが見られることなど、陳靖姑の形象に大きな発展があったことが述べられている。

第四章 『臨水平妖誌』の研究

近年において発見された陳靖姑を主人公とするテキストを素材として、これまでの陳靖姑の物語に加えて、18世紀において都市で発生した妖術パニック（妖術によって生命や肉体の一部が奪われるというデマ、犯人は白蓮教徒とされた）が反映され、また当時芝居や語りもので人気のあった洛陽橋の架橋に関する物語が陳靖姑の出生と結びつけられており、民間祭祀、民間芸能とより関わりの深いテキストであると結論づけている。

結論

福建で生まれた二人の女神がそれぞれ独自の神格を確立した後も、独自の発展を遂げていく過程で、媽祖は福建から全国へ、陳靖姑は福建から浙江へと広がっていった。その中で、王朝の宗教政策に対応しながら、物語の主人公、あるいは人物の一人として、また新たな形象を確立していく。その過程は地域から全国へ、全国から地域へという運動であり、また文人と呼ばれる知識人の世界から地域に暮らす民衆の生活の間の運動でもあった。この結果文献に残されたものは実に多様多彩な女神の形象と、女神達の物語であった。しかし、その形象と物語には福建という地域文化の刻印がありありと残されていることが、本論文の重要な結論である。また、その形象を分析する中で、子育て、子授けの女神自身にも、ジェンダーをめぐる形象の変化（出産する女神、纏足する女神）があることが浮かび上がってきた。これもまた一つの重要な結論である。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、福建と言う地域生まれた二人の女神、媽祖と陳靖姑の神格と信仰、そしてこの女神にかかわる物語を広く、かつ歴史的に研究したものである。そのため、研究の対象は明代末期の小説を中心にしているが、宋代に編纂された伝奇と呼ばれる文言の物語、宗教政策に関わる王朝の記録、宋から清にいたる神と信仰に関わる様々な記録、福建地方で演じられてきた神々に関わる戯曲や語りものなどを資料として、研究を進めたもので、その視野の広さは大いに評価される。

また、対象となる小説について、版本や編纂者に関する先行研究をしっかりと踏まえ、刊行の先後についても十分注意を払うなど、中国文学研究において欠かすことのできない道筋を踏みながら論を進めたことも評価できる。しかし、編纂、刊行に関わった人物をかなり具体的に特定できたがために、その人物を西欧近代の小説の作者に近い存在と見なし、作品の解釈の上で「深読み」に過ぎると批判される点があったことは否めない。

媽祖に関する部分は、全体の中でも説得力に富む部分である。福建商人の活躍に伴い、廟で祀ら

れていた巫女が船上に現れ嵐を起こす妖怪を退治するような神通力を有し、商業と航海を守護する女神となり、王朝の公認する神格ともなって、それが物語に反映されていく。しかし、媽祖はその力の故に、王朝の設えた枠組みにとらわれない私貿易（密貿易）集団の信仰の対象となり、そのために、儒教的価値観を尊重する文人達からは淫祠邪教として嫌悪され、それもまた物語や筆記の中に現れる。『西洋記』において、国家的英雄鄭和の危機を救う媽祖は、倭寇の信仰する邪神でもあったのだ。この両面を明末における王朝の危機と結びつけて論じたことは一つの創見であると言える。また、媽祖の物語の中に『西遊記』の物語が取り込まれ、間テキストを形成しているという指摘も、これまでにない新たな発見で、今後の発展の基礎となるものである。

陳靖姑については、本来子育て子授けの神であったものが、媽祖同様にその機能を拡大していったが、時期的に明朝の海禁政策と重なり、しかも明朝が民間信仰にも厳しい統制策を採ったため、陳靖姑は媽祖と異なり、王朝公認の神となることはできなかった。しかし、それ故に、陳靖姑は民衆に身近な神として存在し、語りものや宗教演劇の中で活躍することとなった。その結果として、物語に描かれる陳靖姑は、福建で盛んな蛇身の水神としての形象をも有するに至ったのである。

しかし、陳靖姑と福建地方の地域文化との関係を指摘しておきながら、観音信仰との関わりへの言及があまり見られず、重要な宗教的藝能である宝巻や祭祀演劇の脚本を十分に使いこなしていないのは、研究の方向が大変に評価されるだけに、残念だという指摘があった。今年の夏前には中国もコロナ禍で実地調査や資料調査がままならなかったというハンディがあったにせよ、この点は今後早急に調査研究を行い、補足をすべきであるという指摘があった。

『臨水平妖傳』としてまとめられた陳靖姑の物語に描かれた近世の都市の妖術パニックは、社会史の分野以外ではこれまでほとんど議論されたことのない問題であり、しかもそれが白蓮教徒という集団への言わば異端分子への差別につながっているという指摘は、感染症パニックが頻繁に起きている近代にもつながる重要な指摘であり、資料を幅広く渉猟していた故の成果である。しかしながら、このパニックがどこで起き、それがどのようにして福建に伝わり陳靖姑の物語と結びついたかは明らかではない。福建で生まれ全国に広まった洛陽橋の架橋伝説と陳靖姑のつながりの指摘とともに、第四章の後半は十分に解答が得られぬまま問題の手がかりを示したに止まっているのは本論文における明確な欠点と言える。これを修正する方向は、張氏自身が自覚しているように、先の指摘と同様に、福建の地方の文化、歴史、民話伝説、祭祀演劇、語りもの藝能を更に広く深く調査研究することにあるというのが審査員の一致した見解である。

氏の研究は、その視野の広さ、問題意識の深さ、さらには広く資料を渉猟したという点で、高く評価できる。また、媽祖、陳靖姑、それぞれの神格の変遷をたどりながら、文献資料を十分に読みこなし、それが物語にどのように反映しているかを丹念にたどっていることも高く評価できよう。しかも、こうした研究ではしばしば民間信仰や地域文化の方向に関心が傾斜してしまう傾向があるが、張氏はこの研究の目的が、小説における形象の分析にあることをおろそかにせず、作品分析と背景となる文化の研究とのバランスを保ちながら議論を進めていることも、研究者として重要な資質である。そのことは、大きく広がった議論を、女神の形象という視点を失うことなく、物語の中の女神がジェンダーとしての女性として、しかもそれは儒教的価値観に基づくジェンダーを強制されていることを指摘することでまとめあげたことと併せて評価できる。

論文には問題点が皆無というわけではないが、先行研究への目配りと研究史を踏まえた問題意識、論文構成力と個々の部分での説得力ある論理展開、幅広い資料の利用とそれを支える豊富な知識と的確な古典読解力、以上の諸点を勘案し、張韜氏の論文は博士（文学）の学位論文に相応しい水準に達しているということで、審査委員会の意見は一致した。